



Title	Kiga語における2音節2モーラ語の声調 : H声調の予期に関連して
Author(s)	梶, 茂樹
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2026, 37, p. 59-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104447
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Kiga 語における 2 音節 2 モーラ語の声調

— H 声調の予期に関連して —

Tonal Behaviors of Disyllabic and Dimoraic Words in Kiga: Effect of H Tone Anticipation

梶 茂樹*

Kaji, Shigeki

0. はじめに

本稿はウガンダ南西部に話されるバンツ一系の Kiga 語の声調の動きについて述べる。特に、2 音節 2 モーラ語の同じような音節構造、そして同じ声調パターンを持つように思われる単語が異なる声調の振る舞いを示す場合があり、この一見奇妙な現象について解釈を加える。

これに関与する規則は、H¹ 声調の予期である。予期とは、本来一定の位置にあるものがそれより前で実現されることである²。一般に、ウガンダ南西部のバンツ一系の言語では、H 声調の予期が起こることが知られている (Kaji 2010)。Kiga 語ではこれが周辺言語よりも強力に働くのである。

以下、第 1 節で H 声調の予期を概観するために Kiga 語の東に接して話される Ankore 語の例を示し、続いて 2 節以下で Kiga 語について述べる。

1. Ankore 語の H 声調の予期

(1)、(2)、(3) は Ankore 語の、それぞれ語幹が 1 音節、2 音節、3 音節の名詞の例である。名詞類の基本的構造は「前接母音-名詞接頭辞-語幹」である。前接母音は o-, a- などの母音 1 個で英語などの冠詞に似た役割を果たす。名詞接頭辞の基本は CV- 形で、これが名詞のクラス³を形態的に表す。語幹は -CV、-CVCV、-CVCVCV など様々な形がある。多くは 2 音節か 3 音節で、1 音節や 4 音節以上のものは 2 音節や 3 音節のものに比べて数が少ない。以上は、

* 京都大学名誉教授 (Professor emeritus, Kyoto University)、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フェロー (Fellow, the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies)

¹ 略語は H: high tone 「高声調」、L: low tone 「低声調」、C: consonant 「子音」、V: vowel 「母音」以外に、以下のものを用いる。Fin 「語尾」、NPst: near past 「近い過去」、Perf: perfective 「完了」、PreFin: prefinal 「前語尾」、Prs: present 「現在」。

² 予期 (anticipation) と言わずに、逆行 (regression) などと言われることがあるが、こういった表現は、言語を外から見た表現で言語学的でない。言語の側から見れば予期となる。

³ Ankore 語の名詞のクラスについては Kaji (2004) を参照されたい。

Kiga 語にも共通する特徴である⁴。(1a)、(2a)、(3a) では名詞接頭辞と語幹の間に - を入れておいた。名詞のあとの数字は名詞のクラス番号である。名詞のクラス番号は所有形容詞形やグロスにもつけることがある。

- | | | | |
|-----|----|-------------------|---------|
| (1) | a. | omú-twe 3 | 「頭」 |
| | b. | omutwé gwangye | 「私の頭」 |
| (2) | a. | ama-gára 6 | 「命」 |
| | b. | amagará gangye | 「私の命」 |
| (3) | a. | omu-tonéra 3 | 「黒雀蜂」 |
| | b. | omutonerá gwangye | 「私の黒雀蜂」 |

(1a)、(2a)、(3a) は単語を単独で発音した場合のものである。それぞれの単語の次末音節に H 声調が見られる。しかしこの H 声調は、本来、つまり基底的には、次末音節ではなく単語の最終音節にあり、それが単独形において 1 つ前の音節で実現されたものである。

では、なぜ語末の H 声調が単独形で 1 つ前の音節に移るかと言えば、それは単独形のあとに来るフレーズ末のポーズの作用を避けるためである。ポーズというのは、例えばドイツ語やオランダ語などに見られるように、その前の阻害音の有声性を奪うなど、言語にとって悪影響を及ぼすことがある。子音ならば 1 つの素性をなくしてもまだ幾つもの素性を持っているので、その存在を認知できる。しかし声調の場合は、もし H という素性がなくなれば、それは L 声調かゼロになってしまうわけで、存在自体が消えてしまう。それを避けるために 1 つ前の音節に避難するわけである。従って、もし単語のあとに来るポーズがなくなれば、語末音節に本来の H 声調が現れる。(1b)、(2b)、(3b) は (1a)、(2a)、(3a) のあとに「私の」を意味する所有形容詞をつけて名詞のあとのポーズをなくしたものである。(1b)、(2b)、(3b) のいずれの場合も、名詞の最終音節に H 声調が来ている。これが基底的に H 声調がある位置である (Kaji 2004, 2010)。なお所有形容詞の接頭辞は、修飾する名詞のクラスに一致したものになり、その形 (分節素) は gu- (クラス 3)、ga- (クラス 6) などと変わるが、声調はすべて L で違いはない。また所有形容詞語幹 -angye 「私の」の声調は 2 音節とも L である。

なお、Ankore 語と Kiga 語の表記は、正書法に声調を表すアクセントマークと母音の長音記号をつけたものを用いる。Ankore 語と Kiga 語は隣接し、同じ系統に属し、かつお互いよく似ているため共通正書法を用いているが、実際の発音は、特に分節素の部分でかなり違うことが

⁴ なお第 3 節で Kiga 語について触れるように前接母音や名詞接頭辞が現れない単語もあるが、これは Ankore 語にも共通する。

ある⁵。ただしこれは本稿で扱う声調の問題には影響しないので、ここでは深入りしない。

次に (4) の例を見てみよう。(4a) は (1a)、(2a)、(3a) の例と同じくポーズの前で単語の次末音節に H 声調が来ている。しかし (4b) を見ると、そのあとに *rwangye* 11「私の」という所有形容詞が来ても H 声調は語末音節に移動しない。これはどういうことかと言えば、(4a) の *orurími* 11「舌」という単語は、基底の H 声調は、(1a)、(2a)、(3a) とは異なり、元々次末音節にあるからである。

- (4) a. *orurími* 11 「舌」
 b. *orurími rwangye* 「私の舌」
 c. **orurími* 11 「舌」

ここで次のことが確認される。すなわち、Ankore 語では語末音節にある基底の H 声調はポーズの前では 1 つ前の音節に移動するが、基底で単語の次末音節にある H 声調はポーズの前でも 1 つ前の音節に移動しない、ということである。(4c) のようにはならないのである。

本稿は、Ankore 語ではなく、その西に話される Kiga 語の声調移動がテーマである。Ankore 語と Kiga 語は隣り合って話されており同じ正書法を用いている。しかし Kiga 語は、Ankore 語や Ankore 語の南の Haya 語などとは違い、H 声調の予期が単に単語の最終音節の H 声調だけでなく次末音節の H 声調に対しても起こるのである (Kaji 2024b)。しかも H 声調の予期は名詞のみならず、動詞や副詞、また不変化詞においても起こるし、また単語を超えても起こる。この点を確認し理解していないと、似たような単語の異なった H 声調の動きに出くわした場合、なぜなんだろうと首をかしげることになる。

2. 疑問-Kiga 語の H 声調の予期

Kiga 語の (5a) *júba*「早く」と (6a) *hánu*「ここ」の 2 つの単語を見比べてほしい。どちらも副詞で⁶、音節構造も CVCV で同じである。そして単独形で同じ HL という声調パターンを持っている。しかしこれらが動詞形に後置すると、動詞形の声調が異なるのである。

- (5) a. *júba* 「早く」
 b. *Ari:jaga júba*.

⁵ 例えば (4b) に出てくるクラス 11 の所有形容詞 *rwangye*「私の」の発音は Ankore 語では [rwanje] であるが、Kiga 語では [gwanje] となる。*rwa* が [gwa] となるのは *w* の軟口蓋化によるものである。詳しくは Kaji (2024a) 参照。

⁶ 正確には (6a) の *hánu*「ここ」はクラス 16 の指示代名詞である。

- c. a-ra-ij-ag-a jubá
 he-Prs-come-PreFin⁷-Fin early
 「彼は最近よく早く来る」
- (6) a. hánu 「ここ」
 b. Ari:jagá hanu.
 c. a-ra-ij-ag-a hánu
 he-Prs-come-PreFin-Fin here
 「彼は最近よくここに来る」

(5b) も (6b) も動詞形は「彼⁸は最近よく来る」を意味し同じものである。しかしその形は (5b) では Ari:jaga であるが、(6b) では Ari:jagá となっている。そしてもう 1 点違いがある。それは、(5a) の júba は (5b) でも júba のままであるが、(6b) では hánu は hanu に変化している。

(5) と (6) の動詞形は、-ij- (不定形 okwija) 「来る」の現在習慣形で、(7) のように、そのあとに何も続かない場合は Ari:jaga である。この動詞形はすべての音節が L 声調で H 声調はどこにも見当たらない。また (8) のように、hánu と同じく「ここ」を意味する aha⁹ を用いた場合も動詞形の声調はすべての音節が L で H 声調はどこにも見当たらない。そして、このすべての音節が L 声調というのは、(5b) の júba があとに続いた場合もそうなのである。それに対して、(6b) の hánu 「ここ」が続いた場合だけ、同じ動詞形が Ari:jagá という風に最終音節の母音 -a が H 声調を持つのである。これは奇妙に見える。この H 声調はどこから来たのだろうか。

- (7) a. Ari:jaga.
 b. a-ra-ij-ag-a
 he-Prs-come-PreFin-Fin
 「彼は最近よく来る」
- (8) a. aha 「ここ」
 b. Ari:jaga aha.
 c. a-ra-ij-ag-a aha
 he-Prs-come-PreFin-Fin here
 「彼は最近よくここに来る」

⁷ PreFin の -ag- は一種の強調を表し、ここでは行為が日常的あるいは習慣的であることを示す。

⁸ Kiga 語は英語などと違って、「彼」と「彼女」を区別しないので、ここは本来「彼/彼女」としなければならないのだが、都合上「彼」とだけ表しておく。

⁹ hánu と aha は同義語である。hánu は北部方言でよく用いられ aha 南部方言でよく用いられる。

答えは (5c) と (6c) に書いてある。まず (5b) の動詞形のすべての音節が L 声調である点に関してである。(5c) と (6c) はいずれも形態素分析をした表記である。(5c) を見ると júba「早く」の声調は本来 jubá であり、(5a) では、この単語の位置がポーズ前であるため H 声調の予期が働き júba となったものである。(5b) も同様である。ここでは H 声調の予期の結果が及ぶ範囲が単語の内部であり、動詞は予期とは関係ない。従って、(5b) では Ari:jaga のままであり、これは (7a) や (8b) の Ari:jaga と同じである。なお、júba「早く」の声調が本来 jubá であることは、(9) で示されている。「最近」の意味は júba だけでいいのであるが、この語は実は「速く、早く、最近」と様々な意味を表すので、「最近」とはっきり言う場合は aha「ここ」を強調的に用いて jubá aha というのである。aha によって júba のあとのポーズが外れているため本来の声調が現れて jubá となるのである。

(9) jubá aha 「最近」

(5b) の Ari:jaga に対して、(6b) では Ari:jagá というふうに最終音節の母音 -a が H 声調を持っている。この H 声調はどこから来たかと言うと、そのあとに続く hánu「ここ」の há の H 声調が、その前の動詞の最終音節に予期されたものである。従って、Ari:jaga は Ari:jagá となり、hánu の há は H 声調が 1 つ前の音節に移動したため L 声調となっている。これは、前節の最後に、Kiga 語では「H 声調の予期が単に単語の最終音節の H 声調だけでなく次末音節の H 声調に対しても起こる」と述べ、さらに「H 声調の予期は ...単語を超えても起こる」と述べたことの実例である。

以上を図式化したのが (10) と (11) である ((10) と (11) は (5) と (6) の再録である)。(10) と (11) でどこか違うかと言えば、いずれの場合も H 声調の予期が起こっているのであるが、(10) では元々の H 声調が単語の最終音節にあり、H 声調の移動が同じ単語の内部で処理されているのに対して、(11) では元々の H 声調が単語の次末音節にあり、その移動が単語を超え、前の単語に及んでいる点である。この場合、単語の次末音節ということは、この単語が 2 音節であるため、単語の初頭音節ということである。

- (10) a. júba 「早く」
 b. Ari:jaga júba.
 c. a-ra-ij-ag-a jubá
 he-Prs-come-PreFin-Fin early
 「彼は最近よく早く来る」



- (11) a. aha 「ここ」
 b. Ari:jagá hanu.
 c. a-ra-ij-ag-a h́anu
 he-Prs-come-PreFin-Fin here
 「彼は最近よくここに来る」

H 声調の予期に関して、Kiga 語が Ankore 語や Haya 語など違うのは、単語の次末音節にある H 声調も前に移動するということである。Ankore 語では許されない *orúrimi 11 「舌」(4c, 12a) が Kiga 語では許されるのである。(13a) 参照。しかし (13b) から見て取れるように Kiga 語でも orúrimi 11 「舌」(13a) の基底形は /orurími/ ¹⁰ である。

- (12) Ankore 語
 a. orurími (*orúrimi) 11 「舌」
 b. orurími rwangye 「私の舌」
- (13) Kiga 語
 a. orúrimi 11 「舌」
 b. orurími rwangye 「私の舌」

3. Kiga 語の 2 音節 2 モーラ語

本節で、Kiga 語で H 声調の予期が起きる場合を確認するために 2 音節 2 モーラ語を中心にまとめておく。なぜ 2 音節 2 モーラ語なのかと言えば、2 音節 2 モーラ語で単語の次末音節に基底の H 声調があった場合、それは単語の初頭音節であるため、ポーズの前で H 声調の予期が起った場合、H 声調が前の単語の最終音節に飛び移る（オートセグメンタル理論の用語ではドックする）からである。Kiga 語は母音の長短を区別する。しかし語末には 2 モーラ音節はない (omútwe3 「頭」のように元々 2 モーラだったものは 1 モーラになっている)。従って 2 モーラ音節が生じるのは単語の次末音節より前である。ではもし単語の次末音節が 2 モーラであったらどうなるかと言えば、H 声調の予期は生じないのである。

- (14) a. /ekibá:ju/ 7 → ekibâ:ju 「マメ、火膨れ」
 b. ekibá:ju kyangye 「私のマメ」

¹⁰ 基底表示で問題となるのは H 声調の位置のみであるため、分節素に関しては正書法式表記を用いる。

- (15) a. /omugóngo/ 3 → omugô:ngo 「背中」
 b. omugô:ngo gwangye 「私の背中」
- (16) a. /omuána/ 1 → omwâ:na 「子供」
 b. omwâ:na wangye 「私の子供」

(14)、(15)、(16) はいずれも、基底形においては、単語の次末音節に H 声調を持ち、実際の発音は、その母音が長母音であるものである。(14) は次末音節に音韻的に長母音があるもの、(15) は次末音節の母音のあとに鼻音複合が来ており、その鼻音複合によって短母音が音声的に長母音になるもの、そして (16) は名詞接頭辞 *mu* の母音 *u* の半母音化による代償延長として短母音が音声的に長母音になるものである。これらの単語では、単独形では基底形の H 声調は音声的にはいずれもその場で（すなわち次末音節で）下降調の声調を伴って現れ、短母音の場合のように H 声調は左へは移動しない。従って、2 音節語であっても 3 モーラ語の場合は、H 声調は前の単語に影響を及ぼさず問題は生じない。

以下、(17)、(18)、(19) で、以上に関係する 2 音節 2 モーラ語を掲げる。関連する語をすべて提示できたかどうかかわからないが、Kaji (2023) に現れる単語を中心に見ていった。(17) は H0 と書いてあるが、これは H 声調がない単語という意味である。従って、H 声調の予期には関与しない。(18) は H1、すなわち基底において最終音節に H 声調がある単語である。ポーズの前では H 声調の予期は起こるが H 声調の移動をその内部で処理できるものである。(19) の H2 タイプは、単語の次末音節に H 声調があるもので、H 声調の予期が起こった場合、その単語を飛び越えて前の単語の最終音節に H 声調が飛び移るものである。なおここに含まれる単語は、名詞類はほとんどない。名詞類は、第 1 節で *Ankore* 語について述べたように *Kiga* 語でも、基本的に「前接母音-名詞接頭辞-語幹」という構造をしており、それぞれが最低 1 音節を含むため通常は 2 音節にならないのである。以下に含まれているものは、(17h) *busha* 14 「何も（ない）」のように前接母音がなく用いられるものや、(17i) *fene* 9a 「ジャックフルーツ」のように前接母音と名詞接頭辞がなく語幹だけの名詞などである¹¹。

(17) H0

- a. *aha* 16¹² /aha/ 「ここ」
 b. *aho* 16 /aho/ 「あそこ」

¹¹ *Kiga* 語の名詞のクラスについては Kaji (2023) を参照されたい。

¹² *aha* 「ここ」はクラス 16 の近接指示代名詞なので、クラスを変えれば、*eki* 「これ」(クラス 7) などとなるが声調は変わらないので、この語類に関しては *aha* 「ここ」で代表させておく。一般に、代名詞を含みクラス番号を振っているものはクラスを変えれば様々な形を取る。しかし声調は変わらないので、いちいち他のクラスのものは示さない。

c.	dara	/dara/	「完全に」
d.	baro 1a	/baro/	「あなたの夫」
e.	iwe	/iwe/	「あなた」
f.	itwe	/itwe/	「われわれ」
g.	imwe	/imwe/	「あなた方」
h.	busha 14	/busha/	「何も（ない）」
i.	fene 9a	/fene/	「ジャックフルーツ」
j.	voka 9a ¹³	/voka/	「アドカド」
k.	kare 12	/kare/	「昔」
l.	nabi 1a ¹⁴	/nabi/	「預言者」
m.	nyina 1a	/nyina/	「彼の母」
n.	nyoko 1a	/nyoko/	「あなたの母」

(18) H1

a.	júba	/jubá/	「速く、早く、最近」
b.	shána	/shaná/	「以外、除いて」
c.	íba	/ibá/	「彼女の夫」
d.	nyówe	/nyowé/	「私」
e.	íwe	/iwé/	「彼」
f.	íbo	/ibó/	「彼ら」
g.	búto 9a	/butó/	「料理用油」
h.	éjo	/ejó/	「明日、昨日」
i.	éka 9a	/eká/	「家族」
j.	hábwa	/habwá/	「(の) せいで」
k.	óbu 14	/obú/	「(で) あるので」
l.	kíno 7	/kinó/	「この」
m.	ífa 5	/ifá/	「不作」
n.	íhwa 5	/ihwá/	「トゲ」
o.	ífo 9 ¹⁵	/ifó/	「下」
p.	íjwi 5	/ijwí/	「灰、埃」

¹³ ルワンダとの国境地帯で用いられる語で、恐らくフランス語の *avocat* からの借用語であろう。

¹⁴ スワヒリ語の *nabii* からの借用語。

¹⁵ クラス 9 としておいたが場所クラスのクラス 21 かもしれない。

q.	múto 1	/mutó/	「若い」
r.	gúmwe 3	/gumwé/	「1 つの」
s.	bína 8	/biná/	「4 つの」
t.	kápa 9a	/kapá/	「猫」
u.	kíro 9a ¹⁶	/kiró/	「キロメートル」
v.	múbi 1	/mubí/	「悪い」
w.	mísa 9a ¹⁷	/misá/	「ミサ」
x.	músa 9a	/musá/	「バナナの種類」
y.	ního	/nihó/	「少し前」
z.	rúfu 9a	/rufú/	「死」

(19) H2

a.	hánu 16	/hánu/	「ここ」
b.	kíri 7	/kíri/	「あの」
c.	kíno 7	/kíno/	「この」
d.	báti 2	/báti/	「このように」

以下 (20) と (21) に 1 音節語 (必然的に 1 モーラ語) の場合の例も掲げておく。Kiga 語では 1 音節の H1 タイプの語は、それだけでは発音がしづらい。既に何回も述べてきたように H 声調の予期ということで、単語の最終音節の H 声調はポーズの前で 1 音節前に行かざるをえないからである。(18e) の íwe 「彼」や (18f) の íbo 「彼ら」は本来は、それぞれ /wé/, /bó/ であり、それが発音しづらいため敢えて母音 i を前に添えてそこに H 声調を持って行っているのである。(22c) に (21a) の kye 7 「彼の」を例にとり、H 声調の予期を図式化しておく。

(20) H0

gye	/gye/	「良く、うまく」
-----	-------	----------

(21) H1

a.	kye 7	/kyé/	「彼の」
b.	he ¹⁸	/hé/	「どこ」
c.	ki	/kí/	「どのような」

¹⁶ 英語 kilometer からの借用語。

¹⁷ ラテン語 missa から。

¹⁸ この語は nkáhe 「どこ」の省略形である。

- d. ho 16 /hó/ 「ここ」
 e. shi /shí/ 強調語

- (22) a. ekitabó kye
 b. ekitabo kyé
 book7 his7
 「彼の本」

- c. ekitabo kyé
- 

4. もう 1 つのタイプの 2 音節 2 モーラ語

Kiga 語の 2 音節 2 モーラ語には、以上で触れなかった、さらに奇妙な声調の動きをする単語がある。(23) のようなものである。数は多くなく、今のところ確認できたのは (23) の 2 語のみである¹⁹。すなわち、これらは H12 と書いてあるように、単語の最終音節と次末音節の両方に H 声調があると考えざるをえない単語である²⁰。

(23) H12

- a. kíte 7 /kíté/ 「どのような様子の」
 b. wé:nka 1 /wénká/ 「自身、自分で、のみ」

(23a) の kíte 7 「どのような様子の」について見てみよう。この語（疑問詞）は形容詞で最初の ki の部分はクラス 7 の接頭辞である。(24b) を見られたい。(24b) の kíte 「どのような様子の」はクラス 7 の ekintu 「物」を修飾しているのであるが、本来すべて L 声調の /ekintu/ の最終音節を H 声調にしている。これは (19) の H2 タイプの語の働きと同じである。しかしながら、(24b) では kíte の kí がまだ H 声調を保っている。H 声調の予期が起こってもまだあ

¹⁹ 正確に言うと (23b) の wé:nka 1 「自身、自分で、のみ」は、é が 後続の nk のせいで長母化するため音声的に 2 音節 3 モーラ語である。しかし (23a) の kíte 7 「どのような様子の」と同様の動きをするのでここで取り上げる。

²⁰ Kiga 語には 1 語の中に H 声調が 2 音節に出てくるものが幾つもある。以下のような例である (Kaji 2024b: 41-42)。

- | | |
|---------------------------------------|---------------|
| a. akagyégyéna 12, obugyégyéna 14 | 「粉濾器」 |
| b. entó:ndóre 9,10 | 「生の熟れたインゲンマメ」 |
| c. nyirá:nsáse 9,10 | 「サツマイモの一種」 |
| d. omukárabâ:nda 3, emikárabâ:nda 4 | 「木製の箱」 |
| e. engórofâ:ni 9,10 | 「手押し車」 |
| f. omukóroró:mbya 3, emikóroró:mbya 4 | 「虹」 |
| g. omubirikíra 3, emibirikíra 4 | 「じょうご」 |

とに残る *ki* の H 声調はどこから来たのだろうか。唯一考えられるのは、これがポーズの前ということであるから、最終音節の *te* から来たということであろう。実際 H 声調が前に移ったあとの *te* は L 声調である。(24c) のような H 声調の移動である。*/kíté/* の *té* の H 声調が *ki* に移り、そして *ki* の H 声調が 1 つ前の */ekintu/* の *tu* に移るのである。Hyman (2022) の言う High Tone Bumping (H 声調のぶつかりによる玉突き移動) である。

(24) a. *ekintu* 7

object, thing

「物」

b. *ekintú kíte*

object7 how7

「どのような様子の物」

c. *ekintu kíté*



(23b) の *wé:nka* 1 「自身、自分で、のみ」は上で述べたように、正確には 2 音節 3 モーラ語である。しかしながらこの 2 音節語は、*kíte* 7 「どのような様子の」と同じ声調の動きをし、そしてさらに、それぞれの音節が H 声調を持っていることを明らかにしてくれる。

以下、動詞形に後置した場合を見ていくが、まずあとに何もつかない通常の動詞形から見てみよう。(25) は動詞 *-gyend-* (不定形 *okugyenda*²¹) 「行く、出かける」の近い過去形である。(25a) *Ya:gyé:ndire*. 「彼は行った。」には H の予期が働いている。*é* の H 声調は完了語尾 *íre* の *i* から来たものである。(25c) に H の移動を図式化しておく。

(25) a. *Ya:gyé:ndire*.

b. *a-a-gyend-íre*

he-NPst-go-Perf

「彼は行った。」

c. *a-a-gyend-íre*



(26) は同じ動詞形のあとに */wénká/* 「自身、自分で、のみ」をつけたものである。(24) と同

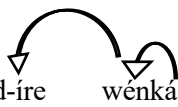
²¹ この語も母音 *e* のあとに 鼻音複合 *nd* が続いているため *e* が長くなり本来音声的に 4 音節 5 モーラ語なのであるが、(23b) の *wé:nka* 1 「自身、自分で、のみ」などと違って、母音 *e* の声調が低い。母音の声調が低い場合は、ほとんど母音の長音化が起きない。そういう場合は長音記号をつけない。

じく High Tone Bumping 現象が生じている。(26a) では H 声調が 3 音節にわたって出てくるが、動詞 Ya:gyendíré「彼は行った」の í の H 声調は動詞形 /ya:gyendíré/ が本来持っている H 声調である。そして Ya:gyendíré の最終音節 ré の H 声調は /wénká/ の wé の H 声調が予期されたものである。そして wé:nka の wé の H 声調は /wénká/ の ká の H 声調が予期されたものである。このことは、wé:nka という発音自体が示している。もしこの語の wé の H 声調が /wé/ 自体の H 声調ならば、この音節は 2 モーラ音節であるため、ポーズの前では wê:nka となり H 声調の予期は起きない。(15a) の omugô:ngo「背中」参照。(26c) に 2 つの H 声調の移動を図式化する。面白いのは wé: は音声的に 2 モーラなのに、その声調が 1 音節前に予期されていることである。

(26) a. Ya:gyendíré wé:nka.

b. a-a-gyend-íre wénká
 he-NPst-go-Perf alone
 「彼は自分だけで行った。」

c. a-a-gyend-íre wénká



興味深いのは (27) である。ここでは /wénká/ 1「自身、自分で、のみ」のあとに「完全に」を意味する副詞 dara/dara/ が続いている。(27a) にも (26a) 同様 H 声調が 3 音節に見られる。まず動詞形 Ya:gyendíré「彼は行った」の í の H 声調は、(26a) 同様、あとにポーズが続かないため、基底形 /ya:gyendíré/ の í が持つ H 声調がそのまま反映されたものであろう。また最終音節 ré の H 声調は (26) 同様 /wénká/ の wé の H 声調が予期されたものであろう。そして /wénká/ の wé の H 声調は消えている。さらに、/wénká/ の ká は wenká のように H 声調を持っている。これは元々持っていたものが、dara「完全に」があとに続きポーズが消えたため予期されなかったものであろう。従って、動いた H 声調は (27c) に見るように /wénká/ の wé の H 声調のみである。

(27) a. Ya:gyendíré wenká dara.

b. a-a-gyend-íre wénká dara
 he-NPst-go-Perf alone completely
 「彼は全く自分だけで行った。」

c. a-a-gyend-íre wénká dara



d. *Ya:gyendíré wé:nká dara.

以上の説明で、(27a) の *wenká* の *ká* の H 声調は理解できる。しかし 1 つ説明できないことが生じている。それは /*wénká*/ の *wé* の H 声調がなぜ予期されるのかということである。ポーズから 4 音節も離れ、しかも音声的に 2 モーラであるにもかかわらず予期されているのである。つまり (27d) のようにはならないのである。

その理由は今のところ不明である。(26) までの例は、H 声調の予期に絡むのは 2 語であったが、(27) では 3 語である。このことが関係しているのか。あるいは /*wénká*/ という単語の特殊事情であろうか。あるいは High Tone Bumping に時間差があるということだろうか。High Tone Bumping というのは Hyman (2022) の理解では、H 声調が右から押されて左へ 1 音節ずつずれるということである。しかし、そうではなく /*wénká*/ の *wé* の H 声調が先に予期され、そのあと *dara* 「完全に」などの語があとに続き /*wénká*/ の *ká* の H 声調が保たれるということかもしれないということである²²。もしそうならば、/*wénká*/ の *wé* の H 声調が 1 音節前に予期されて自らは *we* となるのは理解できるが、その場合でも、音声的に 2 モーラであるにもかかわらずその H 声調が予期される点が疑問として残る。

(27a) で /*wénká*/ に起きることは、相手が動詞ではなく、(28) のように名詞でも起きる。(28a) では /*wénká*/ の *wé* の H 声調がやはり 4 音節も離れた /*omuntu*/ 1 「人間」の最終音節に予期されるのである。(28c) 参照。しかも (28a) で見るように /*wénká*/ の *wé* の H 声調は消えている。(27a) の場合と同様である。

(28) a. N'ómuntú *wenká* *dara*.

b. ní omuntu *wenká* *dara*
it.is person only completely

「彼は極めて特殊な人間だ。誰も彼のようにではない。」

c. ní omuntu *wenká* *dara*



5. 終わりに

本稿は Kiga 語の 2 音節 2 モーラ語の声調の一見特異な動きについて考察した。これに関連するのは H 声調の予期である。Kiga 語には長い音節の単語も短い音節の単語もあるが、そのうち 2 音節 2 モーラ語には声調的に見て LL、LH、HL、HH の 4 種類がある。このうち LL

²² High Tone Bumping の適用は無限定ではなく条件があることが Kiga 語について Kaji (2024b) に示されている。Kiga 語では母音終わりの語に母音始まりの語が続く場合、母音省略など幾つかの規則が働き新たな音節形成が行われる。そして H 声調の予期はその新たな音節を範囲にして行われるのである。

タイプの単語は H 声調がないので H 声調の予期は生じない。また LH タイプの単語では H 声調の予期は生じるが、予期された H 声調は同じ単語内に留まるため、問題は生じない。それに対して HL タイプの単語では、予期された H 声調が前の単語の最終音節に取り付くため、前の単語の最終音節が L 声調の場合、その声調が H になるという一見奇妙な現象が生じる。しかしこれも H 声調の予期であり、単にその範囲が単語を超えたというに過ぎない。

Kiga 語の 2 音節 2 モーラ語のうち HH タイプの単語は、H 声調の予期が 2 箇所で行われる点、LH タイプ、HL タイプとは異なっている。まず単語の初頭音節の H 声調が前の単語の最終音節に予期されたあと、その初頭音節に自らの単語の最終音節の H 声調が予期されてくるのである。また 2 音節 2 モーラ語ではなく、2 音節 3 モーラ語であるが、/wénká/ 1「自身、自分で、のみ」の場合は、そのあとにさらに別の単語が続いた場合、最終音節の H 声調はポーズと言う条件が外れているので、予期されずにそのままの位置に残る。しかし初頭音節の H 声調は予期され、1 つ前の単語の最終音節に取り付くのである。この振る舞いをするのが分かっているのは現在のところ /wénká/ のみであるが、/wénká/ の前の単語が動詞であっても名詞であっても生じる汎用性のあるものである。これは /wénká/ 1「自身、自分で、のみ」という単語の個別的な問題か、あるいは関与する単語の数が原因か、あるいはさらに別の問題が関与しているのか。この点についてはさらなる究明が必要である。

参考文献

- Hyman, Larry M. 2022. “High Tone Bumping in Runyankore”. *Journal of African Languages and Linguistics* 43(1): 37-81.
- Kaji, Shigeki. 2004. *A Runyankore Vocabulary*. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.
- Kaji, Shigeki. 2010. “A Comparative Study of Tone of West Ugandan Bantu Languages, with Particular Focus on the Tone Loss in Tooro”. *ZAS Papers in Linguistics* 53: 99-107.
- Kaji, Shigeki. 2023. *A Rukiga Vocabulary*. Shoukadoh for the Center for the Language Studies.
- Kaji, Shigeki. 2024a. “Palatalization and Velarization in Rukiga Pronunciation”. *Working Papers in African Linguistics* 2: 1-28.
- Kaji, Shigeki. 2024b. “Tone Patterns of Rukiga Nominals: An Overview”. *Working Papers in African Linguistics* 2: 29-52.